

タレント

新田 恵利 さん

自分らしく、無理せず、マイペースで

バブル全盛期に一世を風靡したアイドルグループ、おニャン子クラブ。その代表メンバーとして多くのファンを魅了した新田恵利さんは、現在、お母様を在宅介護しながら、仕事を続けている。当時と変わらぬまぶしい笑顔の陰で、突然の介護にどう向き合ってきたのか、話をうかがった。

PROFILE >

【にった・えり】1968年、埼玉県上福岡市（現ふじみ野市）出身。1985年、フジテレビの『夕やけニャンニャン』のアシスタントとして芸能界デビュー。同番組で結成された「おニャン子クラブ」のデビュー曲『セーラー服を脱がさないで』でフロントメンバーに選ばれ人気を博す。翌年1月には『冬のオペラグラス』でソロデビュー、同年9月におニャン子クラブを卒業。1990年に芸能界を一時引退した後、1993年に芸能界復帰。現在はタレントとしてテレビ番組や舞台に出演する他、ラジオ日本「加藤裕介の横浜ポップJ」のパーソナリティーも務める。ブログ「新田恵利のE-AREA」<https://ameblo.jp/nittaeri/>

「おニャン子クラブ、時代の新田恵利さん



——新田恵利さんは1985年に今の、AKB48や乃木坂46に通じるアイドルグループの先駆け、おニャン子クラブの会員番号4番としてデビューされていますが、子どもの頃から芸能界への憧れはあったのですか。

ビューティー・ペアが流行ればテレビで観たり、ピンク・レディーが流行れば近所の友だちと一緒に真似することはありましたが、皆の前で歌いたいかアイドルになりたいという憧れは全くなかったですね。——では、デビューのきっかけは何だったのでしょうか。

私が高校2年生の時、女子大生のお姉さんたちが出演する『オールナイトフジ』というフジテレビのバラエティ番組が人気だったんですが、「女子高生版に出演する女の子を募集しているよ。新田も応募すれば？」と高校の先輩に勧められたのがきっかけです。芸能界には興味がなかったのですが、採用されたらハワイに行けるかもしれないと

聞いて応募しました。

——それで採用されたわけですか。

そうですね。その時はスペシャル番組の採用だったんですが、「4月からスタートする新番組でアシスタントをしませんか？」とお誘いを受けて。当時のアシスタントはフリップを持って「郵便番号はこちらです」と指差したり、ワゴンを持って行くくらいだったので、「それなら私にもできるかな」と思ってお引き受けすることにしました。

当時アルバイトをしていたケーキ屋さんの時給が350円なのに、日給5000円だったんですよ。高卒の初任給が12〜13万円の時代に、週5日の出演で月10万円もらえるって聞いて飛びつきました。だから、私の中では「アルバイト先を変えた」くらいにしか思っていなかったですね。

——フジテレビのバラエティ番組『夕やけニャンニャン』のスタートと同時におニャン子クラブが結成され、デビューすることになったんですね。アルバイトのつもりだったのがアイドルデビューすることになって、躊躇や不安はなかったのですか。

若さって怖いですね（笑）。何の抵抗もなかったです。生放送だからスタッフはピリピリしていたでしょうけど、17、18歳の小娘たちは学校の休み時間のノリでおしゃべりしていたら、いつの間にか授業が始まっていた、みたいな感じでした。見るもの聞くもの

何もかもが目新しく、ちょっとわかつてくると楽しくって。

——テレビに出演されるようになって、学校でも騒がれたんじゃないですか。

関東地方のローカル局から始まった番組でしたし、通っていた学校も田舎にあったので、デビューして間もない頃はそんなに大変じゃありませんでした。デビューは高校3年の時だったので、1年生の時から一緒に過ごしてきた同級生の皆は、「なぜ新田がテレビに出ているの？なぜ新田なの？」と思っていたんじゃないかな。

——両親の反応はどうでしたか。

小さい頃から自分で責任を取れるなら何をしてもいいという教育方針でしたし、それまでもアルバイト先は自分で決めてきたので、特に相談はしませんでした。『夕やけニャンニャン』でデビューする時も、自分で決めて「お引き受けします」と言ったら、スタッフから「親の承諾も必要だよ」と言われて、ようやく親に話したくらいです。

——おニャン子クラブはデビュー直後から社会現象になるほど人気加熱し、翌年、新田さんはソロ歌手としてシングル曲の『冬のオペラグラス』を出されていますが、ソロデビューの直前にお父様を亡くされたそうですね。

ソロデビューは元旦だったので、その1週間前のクリスマスに父を亡くしました。私が朝、学校に行く前も学校から帰った時も元気だったのに、仕事から帰ったら、



私が朝、学校に行く前も学校から 帰った時も元気だったのに、仕事から 帰ったら、もう父の姿は無かった…。

もう父の姿は無かった…。本当に急でしたね。

——お父様は闘病されていたのですか。

大工の棟梁をしていた父は、何よりもお酒が大好きで、肝硬変を患っていました。私が中学2年の時には一度ICU（集中治療室）に入り、お医者様から「お酒をやめなさい」と言われていたんですけど、それでもやめられなくて。肝臓はポロポロで、

いつ逝つてもおかしくなかったんでしょけ
ど、私もまだ子どもでしたから「急に死
んじやった」みたいな感じでした。

——ショックだったでしょうね。

ショックでしたね。救急車で運ばれる途
中で亡くなったと聞いて、病院にも行きま
せんでした。夜遅くに母が私の部屋をノック
して「恵利ちゃん、お父さんのお遺体帰って

きたけど、どうする？」と聞いても、「会い
たくないッ!!」と言ったりして。気持ちの
整理がつかなかったし、父が死んだと思
いにくかったんでしょね。その後、私が
亡くなった父の顔を見たのは、お通夜の時
でした。

——突然のことで、気持ちの整理をするの
は大変だったでしょう。

そうですね。ただ、私は父が56歳の時に
生まれたので、親との別れは皆より早いと
覚悟していましたし、お酒で体を壊してい
たのも知っていました。でも、亡くなる前
には闘病期間があつて、「会わせたい人がい
たら会わせてください」と言われるシーンが
あると思つていたので、そういう意味では
受け入れがたかったですね。

——そんな一番つらい時にソロデビューを
されたわけですね。つらい気持ちを仕事で
紛らわせられた部分もあるのですか。

年末年始におニャン子クラブのハワイロケ
が決まつていて、スタッフには「大変な時だ
から来なくてもいいよ」と言っていたいた
のですが、母が「家にもお父さんの思い
出があり過ぎるから、気分を変えするため
に行つてらっしゃい」と送り出してくれました。
でも念願のハワイに行つたはずなのに、
いざ現地に着いたら高熱で倒れちゃつて。
スタッフも1日、2日休ませれば治ると思つ
たんでしょけれど、ホテルで2日間寝込ん
でも治らなくて、結局入院しました。

日本ではまだカウンタダウンなんてやつ

ていない時代に、初めてのカウンタダウンを病院のベッドで聞きながら「海外なのね」と思いながら眠って、目覚めたらお雑煮を出してくれました。だから初めてのハワイの思い出は、ほぼ病室です。ハワイの病室の壁紙は、日本と違って大きな青い花柄だったんですよ(笑)。

——病室の壁が花柄とは、さすがハワイ。それで仕事もできないから、先に帰国したんですけど、帰りの飛行機の中ではほぼ全快でした。帰れるって聞いたなら、元気になりました。きつと精神的なものだったんでしょうね。

——その後『冬のオペラグラス』は大ヒットしましたが、おニャン子クラブでの活動期間は意外と短かったんですね。

そうですね、私は1年半で卒業しました。——おニャン子クラブを卒業後は、タレントとしてご活躍されたんですね。

忙しいまま流されて、20歳を過ぎた頃にはアイドルとしての人気も落ち着きました。そこで初めて「さあ、私はこれからどうやって生きていこう」と考えるようになって。今みたいにアイドルの先にママドルやバラドルといった選択肢もなかったし、女優をやれるだけのものを私は持っていないから、このままタレントとしてやっていくんだろうな。「でも、それでいいのだろうか?」と。——そのような葛藤もあって、22歳の時に一度引退されたんですね。

20歳から2年間考えた末に、「ものを書

く仕事がやりたい」と思っ引退しました。もともとお手紙を書いたり本を読むのは好きでしたし、小学校の授業で習ってからは詩も書いていたんですけど、それが仕事になるとは思っていませんでした。

芸能界でものを書く仕事をされている方を間近に見るうちに、自分も書くことをメインにできないかなと。大好きな女性作詞家が出て、その方の弟子になったかったのですが、希望は叶いませんでした。そんな時、TVガイドや東洋経済の編集部の方から声をかけていただき、連載小説や経済誌の記事を書かせてもらいました。

ただ、それ以外はおニャン子クラブに関する執筆の話ばかりで、どうしても「新田恵利」としてしか見てもらえなくて。だったら「ものを書くことは長いスパンでの目標にしよう」と、タレントに戻ることにしました。

——再び芸能界で活動されるようになって、気持ちに変化はありましたか。

17歳から22歳までの仕事は「やらされている」感覚でした。でも、25歳からは「仕事をさせていだいてる」という気持ちになったことが、一番大きな変化です。

25歳からは「仕事をさせていだいてる」という気持ちになったことが、一番大きな変化です。

——どんな仕事をされているのですか。

旅番組もあればバラエティ番組もありまし、母の介護が始まってからは介護をテーマにした講演などもお引き受けしています。

——今の話に出てきたお母様の介護について話をうかがっていききたいのですが、もともと同居されていたのですか。

29歳で結婚して2年後に夫が3階建ての二世帯住宅を建ててくれたんですけど、その時から同居しています。当時母は私が飼っていた犬の散歩にも行ってくれていたのですが、足腰は私より丈夫なくらいでした。

——介護はいつからされているのですか。

今から5年前、母が85歳の時です。私は母が39歳の時に生まれたので、私が結婚した時はすでに60代後半でしたし、骨粗鬆症の診断を受けていて、3年に1度くらいの割合で背骨の圧迫骨折が起きていたんです。

ただ、骨折しても、痛みさえおさまれば日常生活に戻れていたんですね。入院しても安静にしているだけです。圧迫骨折も3〜4回目になると自宅療養をしていますが。だから、5回目の時も今までと同じだと思っっていたんです。

「大変でしたね。大丈夫ですよ」と 言われて、やっと息ができた気が しました。

でもその時は、母のほうから「入院したい」と言い出しました。私も10年ぶりに舞台の仕事をしてきた時期で体力的にきつかったし、入院してくれたほうが安心できるから、母の希望通り入院させたいんです。

ところが、だんだん母の様子がおかしくなってきた、他界した父のことを「お父さん家は何してる？」とか言うようになって。

後々、医学情報番組に出演させていたいた時にわかったのですが、母は、せん妄という症状でした。せん妄は一時的な意識障害で、そのまま認知症になる方もいるんですけど、落ち着けば普通に帰ることも多いそうです。高齢者は入院したり、引越したり、敏感な方だと部屋の模様替えをしただけでも、急に環境が変わるとせん妄になる方が少なくないみたいです。

でも、その時は「母が認知症になった」と思っただけで担当医に相談して「慣れない環境にいるよりも、自宅に戻ったほうがいい」と言われ、すぐ退院させることにしました。

介護が必要になったと気づいたのは、母を連れて帰ろうとしたまさにその時でした。タクシートのドアに車椅子を横づけして、母

に「立って」と言ったら立ってないんです。びっくりしましたよ。「入院前は歩けていたのに、なんで歩けなくなるの？ 病院にいたのに、リハビリしていなかったの？」って。後から知ったのですが、その病院では以前は行っていたリハビリをやらなくなっていたんです。病院の体制が変わってしまった。

とりあえず、その場合は母をタクシードに押し込んで家に戻ったのですが、私一人じゃ母を抱えきれなくて、ウチに来ていた兄に向かつて「お兄ちゃん、ママが立てなくなってる！ 歩けないよー」と大声で叫んだら、兄が裸足で家から飛び出してきました。

——お兄さんも焦っていらしたんですね。

私は普段大声を上げたりしませんし、冷静沈着なほうなので、兄も何事かと思っただけでしょう。そこから在宅介護が始まりました。

ちょうど舞台が終わって一段落したところだったんですけど、母はトイレすら一人で行けない状態だから、やらなきゃいけないことがいっぱい。

母を兄に任せ私は市役所に行ったのですが、どの課に行ったらいいかわからない。消去法で残った福祉課に行って、母の状態

を説明し「どうすればいいでしょう？」と尋ねたら、B5の紙を1枚渡されただけで。その紙に書いてあった地域包括支援センターに電話をして、そこで初めて「大変でしたね。大丈夫ですよ」と言われて、やっと息ができた気がしました。

母が立れないとわかった時からずっとパニックで、感情がマックスの時点で止まっていますから、「大丈夫ですよ」の一言が涙が出るほどうれしくて。電話をかけて30分も経たないうちに来てくれて、「地域包括支援センターの人ってすごい」と思いましたね。

——在宅介護のための準備はどうされたのですか。

介護ベッドを入れることにしたんですが、介護をする人が動けるようベッドの周囲360度にスペースがあるのが理想だと言われました。でも、広い家に住んでいるわけじゃないから、兄と2人で家具を大移動させて何とかスペースを作りました。

おむつも必要だけど、大人のおむつの取り替え方なんてわからなくて。地域包括支援センターの方にやり方を教えていただいて紙おむつを買いに行ったものの、ドラッグストアの紙おむつ売り場で「どれを買えばいいんだろう？」と杲然としました。母の体にぴったりのSサイズが欲しいのに、MとLのサイズしか置いていないし。

それに子ども用の紙おむつは1回ごとに捨てますけど、大人用って捨てないんですよ。中にパットを入れて使うんです。



——えっ！ そうなんですか？

少量、中量、大量でパッドを分けて、そのパッドで男女を分けたりするんですが、私はそんなことも知らなかったんです。そんなわけで、毎日やらなきゃいけないこと、学ばなきゃいけないことだらけで、いっぱいいっぱいでしたね。

——お母様は食事は一人でできたのですか。手は使えたんですけれど、座らせるのが難しかったです。首が座っていない赤ちゃんみたいにゴロンと転がってしまうから、腰の部分にいくつもクッションを置かないと、ちゃんと座れない。寝返りも打てない状態

兄も私もお互いに切羽詰ってやっているうちに、乗り越えたんだと思います。

だから、介護認定は「要介護4」でした。

——「要介護4」は日常生活全般において全面的な介助が必要ですし、かなり重いですよ。

そうですね。徐々にだったら準備ができたんでしょうけど、何の準備も、何の勉強もしていなかったので、大変でしたね。

——介護保険で様々なサービスが受けられ

るとはいえ、限度もありますし、「ご家族の負担は大きいと思いますが。

私にとって幸いだったのは、兄が独身だったことと、「親の面倒は長男がみなければ」という考えから、一旦仕事を辞めてウチに同居してくれたことでした。介護しながらできる仕事に再就職し、きょうだいで母の介護をする体制をつくることができました。

——お兄さんは、お母様のおむつを替えることにも抵抗はなかったのですか。

なかったですね。母が元気な時、私は「ママのおむつを替える自信がないことに、自信がある（笑）。だから、足腰を鍛えて健康でいてね」ってずっと言っていたんです。でも、いざそうなってみると、そんなことを言っていられないんですよ。おむつをしている親が目の前にいたら、取り替えなきゃいけない。兄も私もお互いに切羽詰ってやっているうちに、乗り越えたんだと思います。

——介護をする中で、お兄さんとケンカになったり介護施設に預けようという話になったことはないのですか。

介護施設に預けることは、兄のほう嫌がっていますね。実は退院して2カ月後、母がすごく弱ったんです。母はずいぶん前から日本尊厳死協会にも登録しているので、

ふと気づいたのは「私が母を介護しているのは、自分のためなんだな」ということです。

何かあってもこのまま家で看取ってあげるのが母の意思だろうと、私は腹をくくっていたんですけど、兄は「母を入院させる！」の一点張りです。最初で最後じゃないですかね、あんなにきょうだいゲンカしたの。

「もし入院させて延命治療になったら、ママの意思に反するんだよ。それでも入院させるの？ チューブにつながれたままの姿でもいいの？」と聞いたたら、兄は「それでいい」と。結局、私ที่บ้านにいない間に入院させて、その後、母は快復したので、あの時はよかったですよ。

——きょうだいでも考え方は異なりますね。介護が始まってからいろんな方に話を聞く機会がありましたけど、「どんな状態でも、とにかく生きていてほしい」という思いは、男性のほうが強いみたいです。

——お母様は今どんな状態ですか。2〜3年前から物忘れの回数が多くなりましたし、ゆっくり認知症が進んでいるというのを感じます。それも目によつて状態が違います。しっかりしていて、昔話も今の話もちやんとできる日もあれば、できない日もあります。できない日は「接触が

悪かったんだな」と思うようにしています。

——在宅介護をしていると、イライラして当たってしまうという話も聞きますが…。

最初の2年はいろんな意味でつらかったですね。

——お母様に対して声を荒げたりとか？

当初は、思わず「クソばばあ」と言ってしまったこともありましたが（笑）。

——温厚な新田さんがそこまで言ってしまうとは、よほどだったんでしょね。

健康な方でも高齢になると体がきつくなり、わがままになってくるんでしょね。だんだん頭が固くなって意固地になったりするんですよ。

例えば、母が大好きな牛肉を出してあげたのに「私は昔から牛肉は食べない」と言われた時は、イライラとしました。でも、大好きだったバナナを出した時に牛肉と同じように「私は昔からバナナは食べない」と言われた時は、「ああ、そうですか」と（笑）。

——介護する方が学習していくんですね。

介護を始めて1〜2年目はこちらも余裕がなかったですし、母も現実を受け入れられていなかったのかもしれない。でも、



自分の中の考え方や受け止め方が、少しずつ変わっていききました。

去年ふと気づいたのは「私が母を介護しているのは、自分のためなんだな」ということです。母のためにやっていると思つてきたけど、そうじゃなくて、母が亡くなった後、私自身が後悔しないように、今やれることをやっておこうと思つてやっているんだな。本当に嫌だったら、介護施設に預けたりできるだろうけど、それでも介護をしているのは、自分のためなんだなって。

——「自分が後悔しないように」という思いで、日々介護をされていると。



月に1度はお母様と一緒に出かけ

ストレス解消をしながらですけれどね。

——ストレス解消法は何ですか。

以前は母を兄に任せて旅に出ることもありましたが、今は主人に介護の愚痴をガーツと言つて、スツキリして終わりです。

——ご主人は聞いてくださるのですか。

聞いているかどうかわからないですけど、聞いているふりはしてくれていますね。真剣に聞いてアドバイスをされても「うるさいよ」と思うでしょうから、「大変だったね。

年寄りつて大変だね」だけで十分です。

——在宅介護を続ける上で大切なことは、何だとお考えですか。

一生懸命にやらないことですね。私も最初のうちは、母のためにと一生懸命やっていた。何だか先がないような気がして、とにかく母を大事にしなきゃと思つて、頑張り過ぎていました。でも、そうやって頑張つて報われないと、腹が立って暴言を吐いたりするんですよ。

お年寄りつて「日に日に」じゃなくて、「刻々と」変わるんです。例えば、母に「ご飯食べる？」と聞いたら「食べる」つて言うから、わざわざ作つて持つていったのに「食べたくない」とか。「食べたいてつてから、まだ30分も経っていませんけど」みたいな笑)。だつたら、仕事で忙しい時は、ご飯も一から手づくりせずに、作り置きしていた冷凍の煮物をレンジでチンすれば、手間をかけていないから、腹も立たないんです。「ここに置いておくから、食べたくなつたら食べてね」つて言えるんです。

——上手に手を抜くわけですね。

そうです。頑張つて報われないのは、一番腹が立ちますから。でも、そこへ辿り着くまでに3年くらいかかりました。

——試行錯誤を経て、ようやく答えを見つけられたんですね。そんな新田さんが人生の中で大切にされていることは何ですか。

「自分らしく」ということを大切にしています。自分が無理すると、それがストレスとなって周囲に迷惑がかかったりするので、自分らしく、無理なく、マイペースでやっています。仕事についても、世間的に見れば良い仕事でも、自分から見て良くないと思えばお断りしますし、自分に無理はさせないです。

——介護についても、自分らしくですね。最初は母に合わせていたので、爆発もストレスも多かったです。そのストレスが原因の一つとなって脳動脈瘤の手術もしました。

一時的な体の無理は寝れば治りますけど、心の無理を重ねれば、自分の体に回り回ってきます。もし私が倒れれば、兄一人で母の介護はできませんし、周りの人に迷惑をかけてしまいます。そう考えると、自分をいたわつてあげることが大事なんじゃないかなと思います。

——全くその通りですね。お母様も、そう望んでいらっしゃるのでしょうか。貴重なお話をいただき、ありがとうございました。
(インタビュアー／ライター 更田沙良)

自分をいたわつてあげることがも
大事なんじゃないかなと思います。